



テクネ・マクラ「芸術は永し」

# TEXNH MAKRA

女子美術大学歴史資料室 ニュースレター

第 12 号

2019年1月8日発行

**News Letter, vol. 12**

University's Historical Resources Unit,  
Joshi University of Art and Design



JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN



# 女子美術大学と衣服教育

山村 美紀

(芸術学部アート・デザイン表現学科ファッションテキスタイル表現領域准教授)

平成30年（2018）春に刊行した『女子美術大学と衣服教育—その歴史と現在—』【写真1】は、本学開校時より現在までの衣服教育の流れを3年かけて検証した成果である。調査の過程で多くの発見があり、そのいくつかを報告したい。

私立女子美術学校が明治33年（1900）10月30日、認可された際の校則を精査すると、裁縫科は副科の科目のひとつであって正科（現在の学科）ではなかった。翌年3月の学生募集広告において、裁縫科は正科に置かれ、4月の開校を迎えた。

女子自立の職業として裁縫は当然であり、学校経営上も同様と判断したのであろう。実際、共立女子職業学校でも全体の1/3が裁縫を学ぶ学生だった<sup>1</sup>。当初の指導教員は横井玉子（裁縫）、波多野徳（修身・他）、谷田部順子（裁縫・家政）、山崎ラウラー（洋裁）。経済的危機から玉子が佐藤志津に経営を一任した明治34年（1901）11月、赤沼八重【写真2】が教師として加わった。玉子は和服の活動性や衛生面の改善を研究し、志津は美的思考力の備った裁縫指導者の養成に力を注いだ。赤沼は袋物【写真3】を実技に加え、美的感覚と装飾性を指導



【写真2】赤沼八重先生  
女子美術大学歴史資料室所蔵

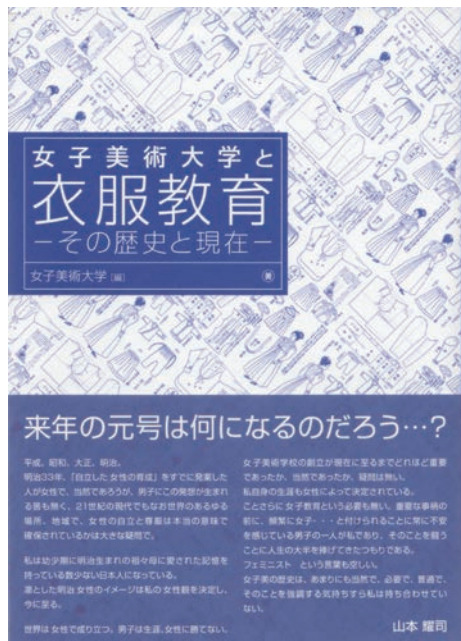
し、皇后陛下への御献上（大正3年）やパナマ・パシフィック国際博覧会（大正4年）【写真4】での金牌受賞に貢献した。大正12年（1923）10月、理事会において財政立て直しが検討され、学生数が少なく、人件費、教材費が掛かる絵画系学科は廃止が決定された。玉子や志津の教育理念を心身に刻んでいた赤沼は「女子美から絵画を無くしてはただの裁縫学校になってしまう。特色のある女子美でなく、佐藤先生の意志に反してしまう。画の中にある裁縫科が魅力あるのだ。」と語り、絵画系教職員と協議を重ね、署名を取りまとめて理事長宅、理事宅を

懇請してまわった。そして、12月の理事会で決定が取り消され、美術教育の道は将来に繋がれた。一方で20年間の和裁教育をまとめるために『メートル法に據る高等裁縫書』全5巻【写真5】を大正13年（1924）に刊行した。赤沼を始めとする女子美術裁縫研究会が編纂し、二度の改編がなされ、戦後も教本とされた女子美の裁縫教育を伝える貴重な書籍である。

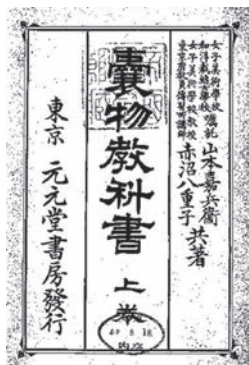
昭和4年（1929）女子美術専門学校師範科裁縫部となり、専修科1年制、専修科2年制も併設された。昭和10年（1935）には専門性を抑えた技芸教育と家庭的女子の養成を目的とした

家政科も開設され、裁縫部や刺繍・造花部の教員は掛け持ちで指導にあたった。昭和18年（1943）には本科裁縫科、翌年には被服科と改称して終戦を迎えた。常に生徒の60%が裁縫科生であり、約5200名の卒業生を送り出した。赤沼は昭和14年（1939）まで主任として、昭和19年（1944）までは袋物の講師として43年間裁縫科を支え、玉子や志津の教育理念を伝え続けた。

昭和24年（1949）新制大学として認可されたが、女子美術大学美術学科・服飾学科・別科は46名の学生しか集まらず、理事会では経営の立て直しが検



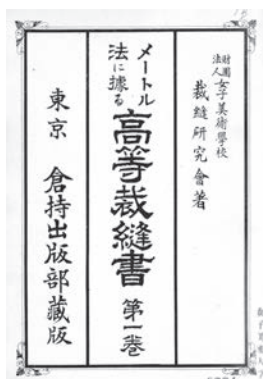
【写真1】『女子美術大学と衣服教育—その歴史と現在—』



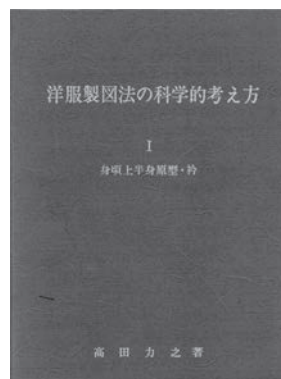
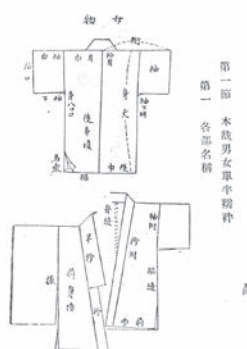
【写真3】山本嘉兵衛、赤沼八重子『袋物教科書』元々堂、明治42年（1909）  
女子美術大学歴史資料室所蔵



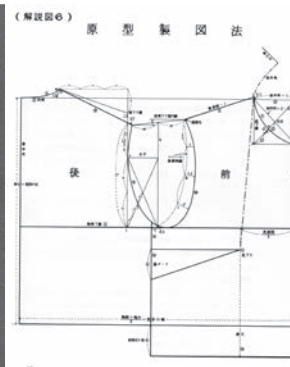
【写真4】パナマ・パシフィック国際博覧会作品と税関ラベル  
女子美術大学芸術学部アート・デザイン表現学科  
ファッションテキスタイル表現領域研究所蔵



【写真5】『メートル法に據る高等裁縫書』全5巻 倉持出版部、大正13年（1924）  
女子美術大学歴史資料室所蔵



【写真6】『洋服製図法の科学的考え方 I 身頃上半身原型・衿』昭和52年（1977）  
女子美術大学芸術学部アート・デザイン表現学科ファッションテキスタイル表現領域研究室所蔵



討され、翌年から服飾学科を短期大学部にすることを決定した。そして、時勢に応じて洋裁教育を主軸に据え、教員にはデザイナーとして活躍していた桑沢洋子と体系化した衣服構成理論【写真6】を研究し続ける高田力之が迎えられた。洋裁ブームもあり、3年後には定員の2倍を超える学生が集まり、森妍子も教員に加わった。昭和38年（1963）、高田クラスは服飾科洋裁教室に改称し、引続き高田の構成理論を教授し、中学校教諭二級普通免許状「家庭」取得の課程を維持した。桑沢・森クラスは造形科衣服美術教室（昭和43年からは衣服デザイン教室）となり、桑沢のデザイン理論を継承しながら森の素材創作を融合させて衣服制作を指導し、取得する教員免許は「美術」に替わった。衣服教育は服飾科と造形科に籍を置くほどに学生が集まる時代であった。平成5年（1993）の短期大学改

組において洋裁教室は服飾デザインコースと名称を変更し、授業内容もデザイン力や企画力に重点をおいた。衣服デザイン教室はアパレルデザインコースと改称し、授業内容は引き継がれた。

18歳人口の減少により、昭和61年（1986）から今後の短大教育組織の在り方について協議され、「衣は衣でまとまる」ことが議論されたが実現せず、平成8年（1996）からは創立100周年に向けて学部・短大改組が総合的に検討され、平成11年（1999）新学科の開設が決定した。

平成13年（2001）、50年の時を経て二つのコースは再び一つにまとまり、4年制へ昇格し、美術大学でファッションと身体について学ぶファッション造形学科が開設された。そして、平成22年（2010）には現在のアート・デザイン表現学科ファッションテキスタイル表現

領域となり、衣服におけるアートとデザインの役割を学びながら、社会、地域、企業とのプロジェクトを実践し、プロフェッショナルな人材の育成を行っている【写真7】。

日本女性の洋装は、明治10年代後半の欧化政策に応じて上流婦人に広まったが、明治20年代の国粋主義の台頭とともに下火となった。洋服の利点、和服の改善点を研究していた玉子は女子美創立当初から高等科に洋裁教育を据えた。明治42年（1909）には裁縫科6科の内、5科で授業が行われた。明治35年（1902）9月に教員に加わった伊澤美祢<sup>2</sup>は子供服を中心に洋裁を教授し、赤沼と女子美裁縫研究会は伊澤の指導を土台に洋服研究を進めた。戦後教員となった高田は、共立女子職業学校で伊澤に洋裁を学んでおり、その際の疑問が洋裁研究に邁進させたと言っても過言ではない。実際、高田理論は伊澤の製

図法をベースにしていると考えられる点が多い。高田が女子美で指導したことによって、洋裁教育は明治期と繋がったと言える。現在も高田理論を引き継いだ教員によって、現代女性の体型を考慮した研究【写真8】が重ねられている。和裁教育は世情により途絶えたが、洋裁教育において118年の衣服教育の流れが見出せたことは意義深いと考える。

註

- 1 明治34年（1901）1月発行の『女学世界』の「共立女子職業学校参観」によると学生総数623名にして内養成科は18名、裁縫科は233名とある。
- 2 明治33年（1900）パリ万国博覧会の日本出品陳列監守として派遣された後、パリに留まって洋裁を学び、明治35年（1902）4月に帰国し、明治43年（1910）には『小児洋服裁縫書』を出版した。



【写真7】卒業制作『いき』立川玲音奈 平成29年（2017）  
女子美術大学芸術学部アート・デザイン表現学科  
ファッションテキスタイル表現領域研究室



【写真8】現在使用している衣服制作テキスト 平成23（2011）～25年（2013）  
女子美術大学ファッションテキスタイル表現領域



# 『『女子美術大学と衣服教育—その歴史と現在—』刊行記念 女子美の衣服教育展』開催

梁 承延 (ヤン・スンヨン) (歴史資料室学芸員)

女子美術大学歴史資料展示室では、現在『『女子美術大学と衣服教育—その歴史と現在—』刊行記念 女子美の衣服教育展』を開催しています(前期:2018年5月23日~8月3日、後期:9月12日~2019年1月25日)。本展は、明治34年(1901)、開校から現在まで綿々と培ってきた本学の衣服教育を1冊にまとめた『女子美術大学と衣服教育—その歴史と現在—』の刊行を記念し、本学の衣服教育史料を紹介するものです。前期は女子美創立から戦中期まで、後期は戦後から現代まで、当室所蔵資料をはじめ、ファッションテキスタイル表現領域研究所所蔵、そして刊行の際に関係者から寄贈いただいた資料を展示しています(本学の衣服教育については本誌2-3頁参照)。ここでは展示資料をピックアップして紹介します。明治34年(1901)に女子

改良服をデザインした本学創立者の一人である横井玉子が考案した「小児改良しめし」【写真1、2】(『婦人衛生雑誌』第145号<明治34年12月20日>発表)。これは、衣服教育出版委員の方々が製図を復元し、当室への寄贈に至った新資料です。しめしとは「おむつ」「おしめ」のことです。明治期以前のしめしは廃尿をうまく吸収せず、衣服まで漏れてしまうため、改良が求められていました。横井玉子考案のしめしは、上下二つに分かれており、ボタンで結合したため、おむつの交換が簡便となり、母親の負担を軽減できるデザインとなります。大正7年(1918)には日常生活、特に衣食住や育児、衛生など、家庭に関する様々な事柄を豊かにすることを目的で開催された「家庭科学博覧会」(大正7年11月2日~大正8年1月15日、会場は東京教育博物館<現

国立科学博物館>)で裁縫科学生が改良学生服、おむつ抑えなどを出品しました。現物がなかったため、本展では「新家庭臨時増刊」『家事科学展覧会』(玄文社、大正7年)に掲載された画像で紹介しました。『女子美術大学学則抄』(国立公文書館所蔵)【写真3】は、昭和24年(1949)2月に文部省より大学設置認可後に作成、同年4月入学式に配布されたとする学則です。この資料によると「女子に対して最高の芸術教育を施し教養高く芸術的創造力の豊かな指導者を養成する事を目的」として芸術学部を設置し、服飾学科と美術学科を置きました。同年発行した「女子美術大学昇格記念祭パンフレット」【写真4】(昭和24年<1949>6月25日~26日)の背景には各学科のシンボルとして筆、糸と針が描かれています。昭和25年(1950)短期大学

部服飾学科設置後の資料としては、戦後本学洋裁教育の基礎を築いた高田力之・桑沢洋子・森妍子クラスで使われた、ファッションテキスタイル表現領域研究所が所蔵する標本類を展示しました。通称「女子美ボディ」と呼ばれる、高田力之の原型を生かすために株式会社都屋と高田研究室が共同開発し完成した「婦人標準原型スタンド」、修正を繰り返しながら塑像によって制作された「1/2木製ボディ」は、片足が外せ、腰の厚みが分かりやすく、スラックスの講義に活用しました。実物を見ながら118年続く女子美の衣服教育を知っていただければ幸いです。

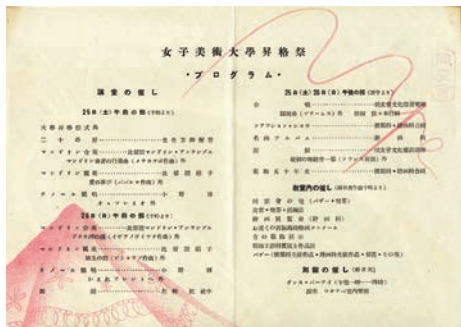
『女子美術大学と衣服教育—その歴史と現在—』  
販売先:株式会社アイシス(女子美術大学杉並キャンパス内)  
TEL 03-5875-1312  
FAX 03-5875-1326



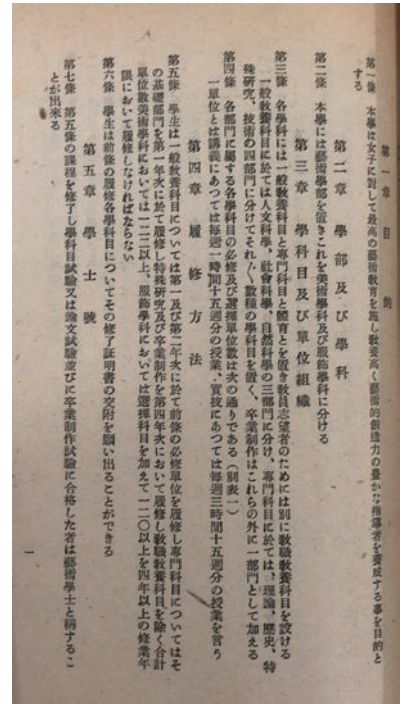
【写真1】横井玉子考案「小児改良しめし」上(復元) 女子美術大学歴史資料室所蔵



【写真2】横井玉子考案「小児改良しめし」下(復元) 女子美術大学歴史資料室所蔵



【写真4】女子美術大学昇格記念祭パンフレット 昭和24年(1949) 女子美術大学歴史資料室所蔵



【写真3】女子美術大学学則抄(部分) 昭和24年(1949)国立公文書館所蔵

# 韓国国立現代美術館出品報告 新女性、女子美の戦前朝鮮留学生たち

梁 丞延 (ヤン・スンヨン) (歴史資料室学芸員)

19世紀後半から20世紀初頭の中・高等教育を受け、経済的に自立し、流行をリードする新しい女性が現れます。社会的、政治的な不平等に異議を申し立て、自由と解放を求めた彼女たちは、「New Woman」「新しい女」「新女性」などと呼ばれ、世界的な社会現象になりました。その彼女たちをテーマとした展覧会が韓国で行われました。本稿では、韓国国立現代美術館主催展覧会「新女性の到着」展(2017年12月21日～2018年4月1日、会場は徳寿宮館)を報告します。

本展は、韓国近現代史においてもっとも重要な社会的変革であり、新たな時代の挑戦を受け入れ、抵抗したり、妥協しながら堂々とした主体的存在になろうとしていた「新女性」を、美術作品とメディアの多様な文化的産物を介して、100年前の新女性を現在に「リコール」(呼び戻す)するものです。戦争などで現存作品が非常に少ないなか、6名の実行委員と4名の諮問委員が、1年のリサーチ期間で絵画、彫刻、刺繍、写真、プリントアート(表紙画、イラスト、ポスター)、映画、大衆歌謡、書籍、雑誌など500点余りの膨大な資料を集め展示しました。

展示は、3つのテーマで構成されました。まず男性(芸術家)と映画・歌謡などの媒体で再現した新女性のイメージを考察。次は近代女性作家たちによる作品を紹介【写真1】。最後は男性中心であった美術、舞踊、文学、社会運動、大衆文化の分野で先駆者と言える5人の新女性を選び、社会通念とジェンダーの視点から再考察しました【写真2】。

昨年6月に実行委員の方が本学に訪問し、近代女性と美術の関係において本学の卒業生が多くを占めており、協力を求められました。デザイン・工芸学科工芸専攻刺繍研究室が所蔵する大正昭和期朝鮮留学生の刺繍作品20点は、当時の刺繍教育や学生の成果がわかる貴重な資料です。戦前は刺繍科を志望した朝鮮留学生が圧倒的に多かったものの、日本画科、西洋画科、編物科、造花科、裁縫科にも在籍しましたが、残念ながら刺繍研究室と当室以外に現存する資料が見つかりませんでした。当室所蔵品は、日本画研究室から移管された《藝術解剖掛図(一)全身骨格》(昭和15年)【写真3】と近年卒業生から寄贈いただいた《刺繍袱紗》(昭和11年-12年頃)の2点です。

《藝術解剖掛図(一)全身骨格》を描いた人物は、韓国で誰よりも早く伝統的な画材で西洋的空間表現を確立し、韓国で高く評価される朴峽賢(来賢)(1920-1976、昭和18年師範科日本画部卒業)です。本作品は、峽賢(来賢)が本学で2年に渡り、美術と科学の接点である芸術解剖学(1年骨格、2年筋肉学)を含めたアカデミックな教育を受けたことを意味します。また本作品は、朴峽賢の初期作品が韓国で初公開されたため、ほぼ全ての美術雑誌や新聞で話題作品として取り上げられました。

本学最初の朝鮮留学生は、羅蕙錫(1896-1948、大正7年<1918>西洋画科師範科卒業)とされます。大正2年(1913)西洋画家を目指し、女性として初めて美術を学びにきた韓国初の女性西洋画家、羅蕙錫が本学を選んだ理由は、当時朝鮮の女



【写真1】第2部「近代女性作家たち」展示風景



【写真2】第3部「5人の新女性」展示風景。美術部門では本学出身の羅蕙錫が紹介されました。

子にとって、本学が唯一の美術専門高等教育機関であったからです。

本学は明治33年(1900)女子高等教育の必要性を認識し、「芸術による女性の自立」「女性の社会的地位の向上」「専門の技術家・美術教師の養成」を建学精神として創立しました【写真4】。大正4年(1915)に刺繍・造花科高等師範科の卒業生、大正10年(1922)に裁縫科高等師範科の卒業生、大正13年(1924)に日本画・西洋画科高等師範科卒業生に中等教員無試験検定の資格が付与されました。美術学校に師範科を設置し、建学の精神に基づいた職業による女性の社会進出の途



【写真3】朴峽賢(来賢)《藝術解剖掛図(一)全身骨格》昭和15年(1940)女子美術大学歴史資料室所蔵



を具体化しました。

羅蕙錫の入学後、女子技芸学院設立者であり韓国梨花女子大学校美術大学美術学科初代学科長を歴任した張善禧（1893-1970、大正13年〈1924〉刺繍科選科卒業・大正14年〈1925〉日本画選科卒業）、韓国誠信女子大学校創立者である李淑鐘（1904-1985、大正15年〈1926〉西洋画科高等科卒業）、権美手芸研究所設立者で韓国刺繍人間国宝の先生で知られる趙貞鎬（1913-没年不明、昭和12年〈1937〉師範科刺繍部卒業）、また、韓国初の立体派画家と呼ばれる朴岷賢（来賢）（1920-1976、昭和18年〈1943〉師範科日本画部卒業）、画家・小説家で韓国文化勲章を受賞した千鏡子（1924-2015、昭和

18年〈1943〉高等科日本画部卒業）など、韓国美術教育系の先駆者たちが次々と入学しました。本展では「新女性」を、女性解放運動、自由恋愛を唱える姿を超えた、朝鮮社会を啓発するエリート女性を指す広い意味を持つと定義しています。彼女たちは、卒業後母国に帰り、専門の技術家・美術教育家として社会に進出、時代をリードする「新女性」として活躍しました。

本展で紹介した本学所蔵の作品は、初めて里帰りするものでした。韓国近現代美術史から漏れていた刺繍作品と《藝術解剖掛図（一）全身骨格》を一挙に見せたことにより高く評価されています。

開会式で韓国国立現代美術館館長は、本学所蔵作品が出品で



【写真4】本学歴史紹介のパネル

きたことに感謝の意を述べました。時代をリードした本学26名の新女性たち。今後新たな発見ができれば、ご紹介したいと思います。

News Letter, vol. 12-4

歴史資料室日誌

## 2017年10月～2018年11月

### 2017年10月

- 女子美術大学歴史資料展示室にて展覧会「女子美人物史展」（2017年10月25日～2018年3月11日）開催。

### 2017年11月

- 韓国国立現代美術館主催展覧会「新女性の到着」（2017年12月21日～2018年4月1日）のため、朴岷賢（来賢）《藝術解剖掛図（一）全身骨格》、李張鳳《刺繍袱紗》貸出。

- 『千葉県道徳教育高等学校用読み物教材』（千葉県教育庁）のため、佐藤志津画像提供。

- 月刊『東京人』（都市出版）2018年2月号のため、佐藤志津、菊坂校舎上棟式画像提供。

- 女子美オーラルヒストリーアーカイブヒヤリングとして子安三喜男名誉教授

に年史編纂、1960年代学園紛争についてお話を伺った。



子安三喜男名誉教授

### 2017年12月

- 韓国国立現代美術館主催展覧会「新女性の到着」開会式参加。韓国朴乙福刺繍博物館\*、ソウル市立美術館千鏡子常設展見学。

\*昭和12年（1937）本学師範科刺繍部卒業。工芸家。

### 2018年1月

- 旧茅ヶ崎校舎跡地見学。

- 女子美オーラルヒストリーアーカイブヒヤリングとして入江観名誉教授に茅ヶ崎校舎時代についてお話を伺った。



入江観名誉教授

### 2018年2月

- 杉並区「広報すぎなみ」2月15日号のため、菊坂校舎画像提供。

- 韓国国立現代美術館に本学創立100周年記念「徳の華版画集」献上。羅蕙錫生家見学。

## 2018年3月

- 小倉文子監修、女子美術大学編集『女子美術大学と衣服教育—その歴史と現在—』（株式会社アイシス）刊行。詳細は、本誌2-3頁参照。

## 2018年4月

- 平成30年度入学式にて、学校史パネル展示（東京・中野サンプラザ）。



入学式パネル展示

## 2018年5月

- 女子美術大学歴史資料展示室にて展覧会「『女子美術大学と衣服教育—その歴史と現在—』刊行記念女子美の衣服教育展」開催（前期：2018年5月23日～8月3日）。



展示風景

## 2018年6月

- 佐倉市立美術館主催「佐藤志津没後100年「女子美術大学と佐藤志津」展」（2018年7月7日～8月12日）のため、関係資料等貸出。高橋直子学芸員論文掲載。
- 韓国放送局SBS日曜特選羅蕙錫ドキュメンタリー（2018年7月1日放送）のため、旧校舍教室他2点画像提供。
- 新座総合技術高等学校インターンシップ受け入れ。



インターンシップ生 作業の様子

- 東洋文庫地域アジア部門現代中国研究班国際関係・文化グループ2018年度第1回研究会「日本占領期の北京に生きた女性美術家・熊唐守一\*について」（2018年6月17日）参加。

\*大正7年（1918）本学西洋画科選科卒業。美術家。

- 軽井沢寮（現在、閉寮）、旧小諸寮跡地見学。

- 女子美オーラルヒストリーアーカイブヒヤリングとして溝田コトエ名誉教授に桃園寮舎監の時代についてお話を伺った。



溝田コトエ名誉教授

- 第1回120周年史編纂部会開催。

## 2018年7月

- 女子美術大学/ラフハラ大学主催展覧会「女子美術大学・ラフハラ大学交流展覧会 オリンピックと文化：過去・現在・未来・つながり」（2018年7月4日～8月1日）のため、情報提供、展示協力。
- 『別冊太陽 日本のこころ 267 堀文子』（平凡社）のため、旧杉並校舎、日本画科授業風景画像提供。
- 平成30年度第1回歴史資料整備委員会開催。

## 2018年8月

- 『ステッチイデー』（日本ヴォーグ社）

10月号のため、大正期刺繍科教室、パナマ・パシフィック万国博覧会賞状画像提供。

- 小平市平櫛田中彫刻美術館明治150年記念特別展「彫刻コトハジメ」（2018年9月14日～11月25日）のため、藤田文蔵《ベーターベン胸像》貸出。

## 2018年9月

- 女子美術大学歴史資料展示室にて展覧会「『女子美術大学と衣服教育—その歴史と現在—』刊行記念女子美の衣服教育展」（後期：2018年9月12日～2019年1月25日）開催。

- 平成30年度第2回歴史資料整備委員会開催。

## 2018年10月

- 公益財団法人日本手芸普及協会主催「キルト&ステッチショー2018」（2018年10月4日～2019年6月29日）のため、『日本刺繍基礎縫』《繡方種類百二十三種》《刺繍型紙》他23点貸出。

- 岩立フォークテキスタイルミュージアム<sup>1</sup>、昭和のくらし博物館<sup>2</sup>見学。

1 館長岩立広子氏 昭和31年（1956）本学芸術学部工芸科卒業。2018年度第6回女子美栄誉賞受賞。

2 館長小泉和子氏 昭和33年（1958）本学芸術学部洋画科卒業。2018年度第6回女子美栄誉賞受賞。

## 2018年11月

- 女子美術大学歴史資料室/女子美術大学芸術学部アート・デザイン表現学科ファッションテキスタイル表現領域研究室共催『女子美術大学と衣服教育—その歴史と現在—』刊行記念トークイベント「ファッションを学ぶ—JOSHIBI-style-」（2018年11月27日、杉並キャンパスADホール）開催。登壇者は小倉文子女子美術大学名誉教授とデザイナー青木明子氏。



会場風景

左：小倉文子名誉教授 右：青木明子氏



News Letter, vol. 12-5

寄贈報告

## 2017年10月～2018年11月

作品・資料をご寄贈いただいた方のお名前を記し、感謝の意を表します。(御寄贈順)

- 山崎慶子氏 土屋みよし下絵、葉書、刺繍道具等 224点
- 朴修賢氏 『千鏡子シンポジウム—千鏡子没後1周年追悼学術行事』(ソウル市立美術館)等 2冊
- 盧三圭氏 『母を追憶して:故李張鳳女子回顧録』等 2点
- 堀田正氏 秋香会ポスター 2点
- 子安三喜男名誉教授 学生運動資料 3点
- 入江観名誉教授 『入江観:故郷(ふるさと)--日光を描く:開館20周年記念』(小杉放菴記念日光美術館)図録等 2冊
- Suwon IPark Museum of Art 羅蕙錫関連資料集 2冊
- 佐藤泰彦氏 佐藤文子『思い出づるま』1冊
- 蔡瑞燕氏 『家乡名人何香凝』図書等 2冊
- 高尾みつ名誉教授 ドキュメンタリー映画「兼子-Kaneko」DVD 1点
- 八木波奈子氏 『Le Jardin des Modes』(1940年)雑誌他高田力之情報提供 4点

### 歴史資料の寄贈について

女子美術大学歴史資料室では本学の学校史・教育に関する歴史資料の収集を行っております。収集にご協力いただける場合は、歴史資料室までご連絡ください。ご厚意に沿えない場合もありますので、あらかじめご了承ください。また、寄贈いただいた資料の取り扱いは、歴史資料室に一任ください。

News Letter, vol. 12-6

お詫びと訂正

女子美術大学歴史資料室ニューズレター『テクネマクラ』第10号(2016年10月1日発行)7-8頁、第11号(2017年10月31日発行)5頁において誤記がございました。下記の通り訂正いたします。

### 第10号 訂正内容

- 7頁 右段 下から3行目  
(誤) 一般財団法人女子美術大学同窓会  
(正) 一般社団法人女子美術大学同窓会
- 8頁 左段 上から8行目  
(誤) 一般財団法人女子美術大学同窓会創立100周年史  
(正) 一般社団法人女子美術大学同窓会設立100周年史

### 第11号 訂正内容

- 5頁 4段目 上から8行目  
(誤) 大崎綾子  
(正) 大崎綾子
- 5頁 4段目 上から14行目  
(誤) 小澤美樹子  
(正) 大澤美樹子

読者および関係者の皆様にご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。

News Letter, vol. 12-7

表紙写真

## 私立女子美術学校裁縫科授業風景

大正5年(1916)

大正6年(1917)3月発行の『私立女子美術学校 第二十一回卒業生記念帖』に掲載された洋服授業の写真。裁縫科教室は、最初から畳ではなく椅子に座り机で授業する西洋式を採用し、最新のミシンを設置した。この写真には、当時洋裁を担当した伊澤美祢(峰子)(手前)と宮崎い糸(左奥)の指導下、共通の布で子ども前掛けを制作中、縫取りテープなどで装飾を施している様子が写っている。この時期に、他学科とともに裁縫科の学生作品がアメリカ・サンフランシスコ万国博覧会に出品し、金牌・賞状を授与された。



テクネ・マクラ 「芸術は永し」

# TEXNH MAKPA

女子美術大学歴史資料室 ニューズレター

第12号

発行日: 2019年1月8日

編集・発行: 女子美術大学歴史資料室

制作・印刷: 株式会社 日相印刷

女子美術大学歴史資料室

〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8 女子美術大学1号館1階

TEL: 03-5340-4658 FAX: 03-5340-4683

E-mail: heritage@venus.joshi.ac.jp

URL: http://www.joshi.ac.jp/history/